

博物館の教育普及活動と古生物学のアウトリーチ

両角芳郎

徳島県立博物館

(現住所：〒770-8041 徳島市上八万町西山 259)

Outreach of paleontology in educational activities of the museum

Yoshiro Morozumi

Tokushima Prefectural Museum, Hachiman-cho, Tokushima 770-8070, Japan (Present Address: Nishiyama 259, Kamihachiman-cho, Tokushima 770-8041, Japan) (kenken@mb.tcn.ne.jp)

博物館における教育普及活動の種類

博物館では、展示を含めて様々な教育普及活動を行っている。そして、これらの中には化石を材料として古生物学の普及につながるものが少なからず含まれる。

博物館が行う教育普及活動には定まった体系的な分類はなく、各館により自由な分類・ネーミングが行われているのが実情であるが、内容的にはおおそ次のように区分することができる。博物館界では、これらのうちの館外に出かけて行う活動（移動展や移動講座、出前授業、講師派遣など）を「アウトリーチ活動」と呼ぶのが一般的であるが、アウトリーチのとらえ方は館や人により差がある。また、古生物を扱う教育普及活動全体が「古生物学のアウトリーチ」の範疇に入ることになる。

<展示>

常設展

特別展・企画展・トピックス展など(期間限定の展示)

移動展(館外施設で行う展示)

<普及行事>

講演会

講座(講義主体の行事)

移動講座(館外施設で行う行事)

実習・体験教室など(実技・実習主体の行事)

野外観察会・見学会・採集会など(野外で行う行事)

展示解説会・ギャラリートーク・ガイドツアーなど

映画会

<学校教育支援>

博物館内で行う授業

出前授業

学校への資料貸し出し

教員研修(対象を学校教員に限る行事)

<その他>

ボランティア等の育成

講師派遣(他機関主催事業への派遣)

図録・解説書等の出版

ホームページでの情報提供

レファレンス対応

古生物をテーマにした教育普及活動

展示

恐竜博物館や化石博物館などと呼ばれる専門博物館はもちろんのこと、ほとんどの自然史系博物館や総合博物館においても常設展の中で多かれ少なかれ化石を展示している。また、多くの博物館が年1回から数回の特別展・企画展を行っているが、化石をテーマにした展示会は観客動員が見込めることや標本展示のしやすさなどから、比較的高い頻度で開催される。また、特別展等の開催に合わせて記念講演会を行うことが普通で、その場合は大学・研究機関の研究者に講師をお願いすることが多い。その他、最近では学校や公民館などの館外施設で小規模な展示(移動展)を行う博物館も増えてきており、その中でも化石は主役の座を占めている。

しかし、恐竜展などの大がかりな展示会は、人気があるからといってどこでも開催できるものではなく、力量のある大きな博物館が中心となって企画し、新聞社等のスポンサーとタイアップした巡回展として開催されることが一般的である。そのため、施設規模や集客力において受け入れ可能な館は限られてくる。単独で規模の大きな展示会を開催しようとすれば、自前の収蔵資料だけでは足りないのでは館や大学等から多くの標本を借用しなければならないことになるが、資料運搬費などの開催経費がかさむ。博物館の運営予算の削減が続く中で、ほとんどの館では展示会の開催に割ける予算が年々少なくなっており、残念ながら自前の資料主体の展示会しか開催できないような状況になりつつある。そうした状況を打開し、たくさんの興味ある化石を揃えた見応えのある展示会を提供するためには、複数館での共同開催による巡回などの新たな方法を開拓することが急務となっている。

また、特別展・企画展のテーマは、恐竜やアンモナイト、大型哺乳類、サメなどの魚類、貝などの限られたグループの化石を扱うものになることが多い。多様な古生物が存在する中で、それら以外の化石を興味深く見せる独創的な展示を開発することも、博物館学芸員の課題である。

表1. 徳島県立博物館の古生物関連企画展と記念講演会（1991～2006年度）

年度	企画展タイトル	記念講演会
1991	和泉層群の化石	
1993	南アメリカの自然	富田幸光氏（国立科学博物館）：南アメリカの哺乳動物－その進化の歴史
1995	貝の世界	
1997	ネアンデルタール人の復活 <巡回展>	馬場悠男氏（国立科学博物館）：私たちはアフリカで生まれ、そしてアジアで育った
1998	神戸－鳴門ルート全通記念 瀬戸内海のおいたち	糸魚川淳二氏（元名古屋大学）：日本が熱帯だったころ－第一瀬戸内海とその生物－
2002	貝化石が語る海の記憶	
2003	アンモナイトのすべて	岡本 隆氏（愛媛大学）：アンモナイトを復元する
2005	絶滅－生き物はなぜ滅びるか－	
2006	奇跡の化石たち	前田晴良氏（京都大学）：アンモナイトの遺骸は浮かか沈むか？－化石化の原点を探る－

表2. 徳島県立博物館の古生物関連普及行事（1990～2006年度）.

●野外自然かんさつ

行事名	内容
立川谷の地質見学	勝浦川流域下部白亜系と含まれる化石の観察
白亜紀の地層を歩こう	"
地質ハイキング－羽ノ浦編	"
島田島の地質見学	鳴門市海岸の和泉層群とコダイアマモの観察
北泊海岸の地質見学	"
地層と生痕化石のかんさつ－穴喰町－	四万十帯古第三系と生痕化石の観察
堆積構造と生痕化石のかんさつ	"
貝化石の観察	唐ノ浜層群の貝化石の観察・採集

●室内実習

小さな化石さがし	藪田層，登層に含まれる有孔虫の抽出・観察
化石スケッチ	アンモナイト，三葉虫のスケッチ
電子顕微鏡で化石を見よう	SEMによる微化石の観察
ミクロの世界－電子顕微鏡で化石を見よう	"
貝化石標本のつくりかた	唐ノ浜層群の貝化石クリーニング
化石のレプリカをつくろう	アンモナイト，三葉虫のレプリカ作製
アンモナイト標本をつくろう	アンモナイトの殻内部の構造が観察できる標本の作製
恐竜の歯のレプリカをつくろう	恐竜の歯のレプリカ作製
木の葉化石の発掘体験	塩原層群の植物化石の剖出
標本の名前を調べる会	夏休みの採集品の同定会

●土曜講座・ミュージアムトーク

コダイアマモのはなし
和泉層群の地層と化石
変わった巻き方をしたアンモナイト
アンモナイトはどのようにくらしていたか
日本の恐竜化石
瀬戸内海のおいたち
鳴門海峡海底のナウマンゾウ化石
やさしい地層と化石のはなし
地層を読む
ちょっとマニアックな貝化石の話
わかりやすい化石学
南中国の地層に記録されたカンブリア紀の大爆発
美しいアンモナイトのはなし

普及行事

化石をテーマにした展示会が比較的多いのにに対し、化石を扱う普及行事は意外と少ないように見受けられる。

子どもたちをはじめ一般市民が興味をもつのは実際に化石に触れることができる行事であり、野外で化石採集が体験できる行事には希望者が集中する。しかし、近くに採集可能な適当な露頭があるという条件に恵まれた博物館は少なく、多くの館ではそうした行事を企画することがむずかしい。また、館内で何かの化石処理を体験させる室内実習を計画しようと考えても、これまた材料調達のむずかしさや学習プログラム不足から困難を伴うというのが実情ではなかろうか。主な博物館の普及行事の実例を年報等から拾ってみると、お話し中心の講座や「化石のレプリカづくり」などの実習が多く見られるのはそのためであろうか。

学芸員は、ポスターやチラシ等で他館の展示に関する情報は比較的よく得ており、実際に視察することも多い反面、他館の普及行事を見学したり、ノウハウを交流しあったりすることは非常に少ないように思われる。博物館が行う普及行事はマニュアルのない活動であり、学芸員自身の研究・経験に基づいて自ら開発すべきものだと考えが基本にはあるものの、どのような材料（化石）を使い、どう展開すれば古生物学のおもしろさを効果的に伝えられるか探求するための他館との交流・連携がもっとあってもよいと思う。

学校教育支援事業

博物館観覧者・利用者に占める学校の児童・生徒の割合が高いことに代表されるように、博物館はもともと学校教育との関わりが深い社会教育機関である。しかし、ここ数年、そうした域を越えて学校教育支援に積極的に取り組む博物館が増えてきた。それは、学校週5日制や総合的な学習の時間の導入に伴う受け皿としての役割が博物館に期待されるようになり、また、博物館側においても、博物館

活動の改善・活性化を図る目標のひとつとして学校教育支援を掲げ、その積極的な取り組みを博物館の存在意義をアピールする実績のひとつとしたいと考えるようになってきたことが背景にある。

古生物分野に関しては、小6理科「大地のつくり」や中学校理科2分野「活きている地球」の単元で、地層の観察と合わせて化石について簡単に学習することになっており、学芸員が学校へ出かけて授業を行ったり（出前授業）、化石の貸出標本セットなどを整備する博物館が増えている。

しかしながら、提供側の博物館（学芸員）と受け入れ側の学校（教員）との意思疎通・連携は必ずしも十分とは言えない。地質学・古生物学を専攻した教員や博物館を利用した経験がある教員は、それなりに博物館資料や学芸員を授業に活用することができるが、それ以外の場合は概して教員は受け身であり、博物館側からの一方通行になっていることが多いように思われる。このような現状において、いかにして博物館と学校との連携を深め、学校教育の場を利用して古生物学のアウトリーチを進めることができるか、普及行事の場合と同様に学芸員間での交流・連携を深めることが望まれる。

古生物学のアウトリーチと博物館の役割

子どもや一般市民、学校の児童・生徒を対象として、日常的に古生物に関する展示や普及行事を行っている博物館は、古生物学のアウトリーチの最前線として大きな役割を担っていることは確かである。また、そこには博物館学芸員はもちろんのこと、多数の大学・研究機関の研究者も関わっておられる。いろいろ課題は多いものの、学芸員同士あるいは学芸員と大学・研究機関の研究者との交流・連携を深めながら、博物館という場を活用して化石のおもしろさを伝える活動を発展させていくことが古生物学のアウトリーチを進める上でも有効であり、重要である。

